

## 突然不穏になって駆け出しガラス窓に突っ込んで重症

-なぜ重症になったのか？-

## ■作業中に他の利用者とケンカに

Hさん(42歳男性)は知的障害者施設の入所者です。自閉的傾向が強く気分がムラがあり、他の利用者との争いを起こすことがあります。特にSさんとYさんとは争いが多いので、関わらないように支援員が注意しています。ある日、作業室で木作業をしている時にMさんがHさんのそばに来て、何か話しかけていました。すると、Hさんは大声を上げて作業台にあった工具を投げ出し、壁に頭を打ち付け始めました。驚いた支援員がHさんの自傷行為を制止しようとする、今度は全速力で駆けだして窓ガラスに頭から突っ込んでしまいました。Hさんは飛散したガラスで首と頭から大量に出血したため救急搬送されました。Hさんは首と頭を3カ所裂傷し、10針縫う大ケガになってしまいました。連絡を受けて駆けつけてきた家族は「以前からトラブルになりやすい他の利用者とは、注意して見守ってくれると言っていたのに」と不満を漏らされました。支援員は家族に対して、「今回関わって不穏になったMさんは、今までトラブルになったことがなかった」と説明し、家族も納得しました。事故のカンファレンスでは、今まで争いを起こしたことがないMさんも要注意リストに加えて、絶えず支援員が近づかないように注意することになりました。

## 防げない事故に対してはケガを防ぐ(軽減する)対策を考える

## ■事故の原因は関わると不穏になる利用者か？

今回のHさんの重症事故の原因は何でしょう？支援員は「関わると不穏になる他の利用者が原因」と考え、関わらないように見守ることが不穏行動の防止対策だと考えています。不穏になって危険行動に出る原因が判明していれば、これらの見守り対策も重要です。しかし、これですべて不穏行動が防げる訳ではありません。



今回の事故は未然に防ぐことも大切ですが、「なぜ重症事故になったのか？」という事故の重症化の原因にもきちんと対応しなければなりません。今回の事故は窓ガラスに頭から突っ込んでしまい、首や頭部を裂傷することで重症事故になってしまいました。不穏行動で突っ走ることは予測できることであり、頭をガラスに突っ込んで大ケガをしない対策を行っていなかったことも問題といえるでしょう。ガラスが頸動脈に刺さっていたら、Hさんは命を落としていたかもしれません。

## ■ガラスに突っ込んで大ケガをしない対策

一般的にはガラスが割れていたとしてもケガを防ぐ対策は2つあります。一つは飛散防止用フィルムを貼ってガラスの飛散を防ぐことです。二つ目はレース状の薄いカーテンなどを設置して、飛散したガラスの破片から身体を守ることです。飛散防止用フィルムを貼るのは大変な作業ですが、安いカーテンを買ってきて窓に設置することはそれほど難しくありません。

知的障害者施設の作業室には角が尖っている古い作業台がたくさんあります。勢いよく走り出して頭を角にぶつければ、重大事故につながります。今は、机やテーブルは全て角が丸めてあり、ぶつかっても酷いケガをしないように配慮されてるものもたくさんあります。知的障害者の不穏行動による事故は、その原因を分析して不穏行動を未然に防ごうとしても限界があり、損害に対して対策を講じることも有効な対策なのです。

## ■防げない事故に対しては損害軽減策が有効

このように、防げない事故に対してはケガなどの損害を防ぐ(もしくは軽減する)対策が有効です。知的障害者施設にはてんかんの持病を持っている利用者もいます。てんかん発作は予測が不可能であり未然に防ぐことができません。立位の状態から勢いよく転倒して頭をぶつけると命にかかわりますから、ヘッドギアを付けて重症事故にならないように対策を講じている施設もあります。利用者の自由な行動を制限せずに命を守るには、損害軽減策が有効なのです。

発行責任者

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社  
マーケット開発部 市場開発室  
担当：森田・山口 TEL 050-3462-6444

担当課・支社 代理店